

## 熊田 衛先生を偲んで

筑波大学基礎医学系

照井 直人

千葉大学大学院 医学研究院

桑木 共之

聖路加国際看護大学教授，東京大学元教授，筑波大学名誉教授，の熊田衛先生は，去る平成14年3月14日突然のご病気でご逝去になられました。享年65歳の若さでした。

葬儀は，熊田先生が日頃晴れがましいことはすべて遠慮されることもあり，ご遺族の意志で内輪だけで，先生が日頃通っておられた教会で行われました。筑波大学から転任の際，あるいは東大の退官の際にも記念パーティ等の行事を一切固辞された先生でしたが，聖路加国際大学の定年退官がすぐ目の前にせまっております，せめて今回は先生と親交のあった方々と一同での記念行事をと考えていた矢先でしたので，まことに淋しい限りです。派手なことがお嫌いであった先生ですから致し方ないことかもしれません。

熊田衛先生は昭和37年東京大学医学部を卒業されたあと，東京大学医学部附属病院医師を経て当時の松田幸次郎教授の大学院に入られました。医学博士号を取得されたあと，米国に渡られ佐川喜一先生，その後Dr. D. Reisとともに，一貫して循環の神経性調節の研究を行われました。特に動脈圧受容器反射についての研究業績は数多くあり，当時初めて実用化されてきた平均化の方法によって大動脈神経刺激による延髄孤束核からフィールドポテンシャルを記録するなど画期的な仕事を行われました。

昭和51年帰国され，筑波大学の医学専門学群および基礎医学系の生理グループの立ち上げに並々ならぬ力をそそぎ，現在の筑波大学の医学部門の基礎を作りあげられました。講義では学生の



評価も高く，わかりやすく丁寧な授業として有名でした。大学院学生の研究者としての養成にも熱心に取り組み，現在国内外で活躍中の何人もの研究者を輩出しました。筑波大学では念願の循環中枢のニューロンの同定に取り組み，現在RVLMニューロン，CVLMニューロンと呼ばれるニューロンの活動の記録に成功したのは広く知れ渡っているところです。これらの業績により，従来単なる黒い箱であった「循環中枢」が広く教科書にまで個々のニューロン結合として描かれるようになりました。

昭和62年，東京大学医学部へ転出され，これまでの電気生理学的手法に加え，遺伝子の分野の発展をすみやかにとりいれて，種々のノックアウトマウスを生理学的研究に導入することを始めら

れました。従来の自律神経生理学の研究材料はラット以上の大きさでしたから、マウスにおける血圧・呼吸などの基本的パラメーターの測定技術の確立から開始し、腎臓交感神経活動の記録など、当時多くの研究者がその重要性は認めながらも躊躇していた技術開発に果敢に取り組みました。多くの共同研究者に恵まれたこともあって、エンドセリン、血小板活性化因子、インシュリン受容体、老化関連遺伝子、アドレノメジュリン、リアノジン受容体などが循環・呼吸調節に果たす役割を次々に解明されました。

研究の傍ら熊田衛先生は、医学書院の「標準生理学」、文光堂の「新生理学」を始めとする教科書の執筆あるいは Ganong の教科書の翻訳、「医科生理学展望」にも力をそそがれ、それらは

多くの学生が利用しています。

日本生理学会では常任幹事を、また数多くの大学での非常勤講師を歴任され、文部省、厚生省（当時）の各種委員会委員も勤められ、日本の生理学をリードされており、まだこれからも活躍が期待されていたのでまことに残念なことです。

熊田先生の研究への取り組み、医学学生への教育方針、学生との家族ぐるみでの接し方等まだまだ我々門下生として学ぶところがあったところに突然のご逝去で、まことに悲しみに堪えません。熊田先生に教えを乞うた門下生としては、まだおたずねすることが多々あったところでしたが、今後さらに日本の生理学の発展の為に邁進することが熊田先生へのお礼として唯一果たすことのできる義務と思うところです。